

# 読む**中学**進学



## 偏差値と

## 大学合格実績の関係



森上教育研究所 学校アドバイザー  
小泉壮一郎

2015/01



今回は、受験者数と偏差値の関係を考えましたが、今回は偏差値と大学合格実績の関係を考えてみたいと思います。

<資料1>は学校ランク別の東大京大一橋東工、人気首都圏国公立、早慶上智、GMARCHの卒業生100人当たりの延べ合格実績です。学校ランクは、首都圏模試の偏差値で、A70以上、B69～65 C64～60 D59～55 E54～50 F49～45 G44～40 H39～のように分類しました。

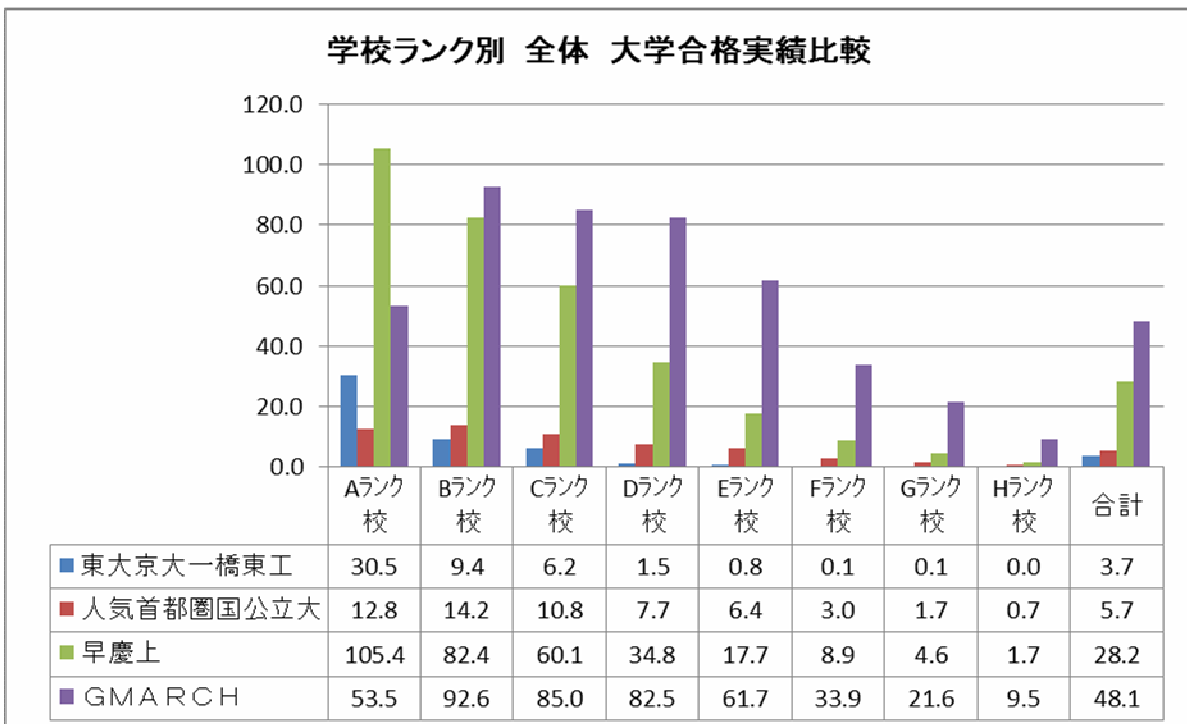
東大京大一橋東工では、Aランク校が30.5人と顕著に多く、B・Cランクでは5名以上合格していますが、D・Eランクでは1名前後となり、F・G・Hランクではほとんど合格していません。明確に偏差値が高ければ大学合格実績も高いことが分かります。

人気首都圏国公立大では、BランクがAランクよりも勝っていますが、それ以外では、偏差値が高ければ大学合格実績も高いことが分かります。Aランク校は、人気首都圏国公立を受験する生徒が少ないため合格実績が少なくなると考えられます。

早慶上智では、グラフでも分かるように、明確に偏差値が高ければ大学合格実績も高いことが分かります。

GMARCHでは、B～EランクがAランクよりも勝っていますが、それ以外では、偏差値が高ければ大学合格実績も高いことが分かります。Aランク校は、人気首都圏国公立大同様、GMARCHを受験する生徒が少ないため合格実績が少なくなると考えられます。Aランク校で多少例外はありますが、偏差値と大学合格実績は対応していることが分かります。

<資料1>





＜資料2＞～＜資料5＞では、学校ランク別の東大京大一橋東工、人気首都圏国公立大、早慶上智、GMARCHの合格実績を男子校・女子校・共学校で分類し、偏差値と合格実績の関係に学校種別でどのような差異があるかを分析します。

＜資料2＞は学校ランク別の卒業生100人当たりの東大・京大・一橋・東工の延べ合格実績を男子校・女子校・共学校で分類したものです。男子校・女子校・共学校を比較すると、Aランク校は、男子校が38.7で女子校・共学校の約2倍の実績となっています。B～Eランク校でも男子校の合格実績が顕著です。F～Hランク校では、合格実績自体が少なく、比較できません。

男子校のA～Hランク校を見ると、A～Eランク校は偏差値が高ければ大学合格実績も高いことが分かりますが、F～Hランク校は比較できません。女子校・共学校でも男子校と同様です。

### ＜資料2＞

	男子校	女子校	共学校	計
Aランク校	38.7	18.1	19.8	30.5
Bランク校	13.1	7.6	9.0	9.4
Cランク校	11.1	2.1	3.3	6.2
Dランク校	2.4	1.0	1.6	1.5
Eランク校	2.8	0.3	0.9	0.8
Fランク校	0.00	0.11	0.10	0.09
Gランク校	0.16	0.02	0.19	0.14
Hランク校	0.2	0.0	0.0	0.0
平均	14.0	2.5	1.3	3.7

＜資料3＞は学校ランク別の卒業生100人当たりの人気首都圏国公立大の延べ合格実績を男子校・女子校・共学校で分類したものです。男子校・女子校・共学校を比較すると、Aランク校は、男子校が9.8で、女子校17.1・共学校17.0と比べると極端に少ない実績となっています。B・D・Eランク校でも同じ傾向があります。Cランク校では共学校が13.4人で最も多く、男子校・女子校の順に多くなっています。F～Hランク校では、女子校・共学校よりも男子校がやや多い傾向があります。

男子校のA～Hランク校を見ると、Aランク校はB・Cランク校よりも合格実績が少なく、Dランク校がEランク校よりも合格実績が少ないなど、偏差値が高ければ大学合格実績も高いとは限りません。女子校では偏差値が高ければ大学合格実績も高いことが分かりますが、共学校ではFランク校がGランク校よりも合格実績が少なく、偏差値が高ければ大学合格実績も高いとは限りません。人気首都圏国公立大では、男子校のD・F・G・Hランク校と共学校のGランク校で逆転現象はありますが、ほぼ、偏差値が高ければ大学合格実績も高いことが分かります。



<資料3>

	男子校	女子校	共学校	計
Aランク校	9.8	17.1	17.0	12.8
Bランク校	11.2	15.4	14.6	14.2
Cランク校	10.4	8.5	13.4	10.8
Dランク校	4.9	8.8	7.5	7.7
Eランク校	9.0	3.5	6.9	6.4
Fランク校	3.2	3.0	3.0	3.0
Gランク校	2.3	1.7	1.6	1.7
Hランク校	2.2	0.9	0.5	0.7
平均	7.6	6.2	4.8	5.7

<資料4>は学校ランク別の卒業生100人当たりの早慶上智の延べ合格実績を男子校・女子校・共学校で分類したものです。男子校・女子校・共学校を比較すると、Aランク校は、女子校109.0で、男子校105.3・共学校94.0と比べるとやや多い実績となっています。D・Fランク校でも女子校が多く、B・C・E・G・Hランクでは男子校・女子校・共学校の順に多い傾向があります。

男子校のA～Hランク校を見ると、Dランク校はEランク校よりも合格実績が少なく、偏差値が高ければ大学合格実績も高いとは限りません。女子校・共学校では、偏差値が低いランクで合格実績が少なくなる逆転現象はありません。男子校の1か所を除き、偏差値が高ければ大学合格実績も高いことが分かります。

<資料4>

	男子校	女子校	共学校	計
Aランク校	105.3	109.0	94.6	105.4
Bランク校	93.8	85.2	73.2	82.4
Cランク校	83.1	49.2	40.0	60.1
Dランク校	30.5	38.0	32.9	34.8
Eランク校	33.6	18.6	17.4	17.7
Fランク校	13.5	16.5	6.3	8.9
Gランク校	5.9	5.7	3.8	4.6
Hランク校	6.8	2.1	1.1	1.7
平均	62.8	32.4	15.8	28.2

<資料5>は学校ランク別の卒業生100人当たりのGMARCHの延べ合格実績を男子校・女子校・共学校で分類したものです。男子校・女子校・共学校を比較すると、Aランク校は、女子校80.0で、男子校40.9・共学校44.8と比べると顕著に多い実績となっています。B・Fランク校でも女子校が多く、C・E・G・Hランクでは男子校が最も多く、共学校が最も多い学校ランクはありません。



男子校のA～Hランク校を見ると、A・Bランク校はC・Dランク校よりも、Gランク校がHランク校よりも合格実績が少なく、偏差値が高ければ大学合格実績も高いとは限りません。女子校・共学校では、偏差値が低いランクで合格実績が少なくなる逆転現象はありません。男子校の3か所を除き、偏差値が高ければ大学合格実績も高いことが分かります。

女子校と共学校は、ほとんど例外は無く、偏差値が高ければ大学合格実績も高いと言えます。男子校については、上位ランク校で人気首都圏国公立大・GMARCHを受験しないために合格実績が少なくなる傾向が見られますが、受験すれば合格実績が多くなると思われるので、男子校でも、偏差値が高ければ大学合格実績も高いと言ってよいと思います。

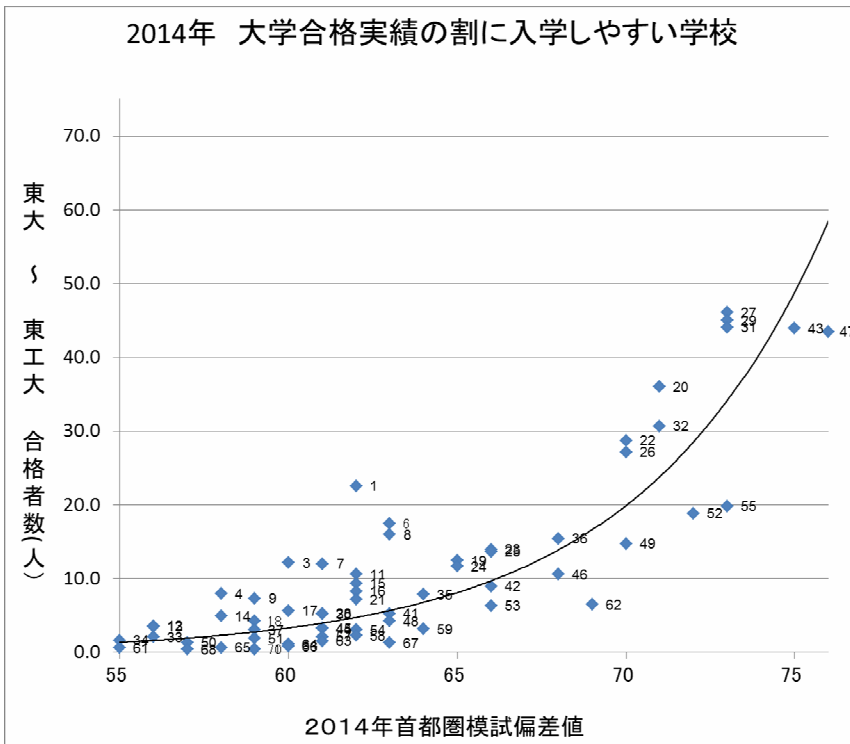
### <資料5>

	男子校	女子校	共学校	計
Aランク校	409	800	448	535
Bランク校	718	1110	865	926
Cランク校	967	713	818	850
Dランク校	775	871	794	825
Eランク校	707	570	626	617
Fランク校	351	515	285	339
Gランク校	298	190	212	216
Hランク校	355	112	65	95
平均	610	540	412	481

同じ年の2014年中学入試偏差値と2014年大学合格実績の関係をグラフで分析して偏差値と大学合格実績が対応しているかどうかを調べてみましょう。<資料6>は、対象校を2014年の学校偏差値55以上の首都圏男子校・共学校、対象大学合格実績を東大・京大・一橋・東工としたグラフです。2014年の学校偏差値をx軸に、2014年の卒業生100人当たりの延べ大学合格実績をy軸として対象となる学校を◆の点として近似曲線を引きました。<資料6>のグラフを見ると、ほとんどの学校が曲線付近に集まっており、2014年の首都圏模試の学校偏差値と2014年の大学合格実績の関係が式で表せることが分かります。中学入試偏差値で大学合格実績は、ほぼ決定していることとなります。



<資料6>



学校偏差値で、ほぼ大学合格実績は決定しますが、例外的に現在の学校偏差値に比べ現在の大学合格実績が顕著に高い学校があります。<資料7>は、例外的な学校ベスト20校です。6年後も同様な大学合格実績が出せると考えれば「大学合格実績の割に入りやすい学校（大学合格実績の割に偏差値が低い学校）」と言えます。実際には、顕著に曲線の上方（曲線の左側）にある学校は、せいぜい10%で、1～7位までとなります。

どれだけ大学合格実績の割に偏差値が低いかは、大学合格実績を学校偏差値に換算して③を計算し、「④標準的な偏差値との差=③-①」で表示してあります。例えば、一位の桐朋は2014年の学校偏差値は62でしたが、2014年の卒業生100人当たりの延べ大学合格実績（東大・京大・一橋・東工）は、22.5人でした。この合格実績を2014年の学校偏差値に換算すると「③②の合格数で標準的な偏差値」70.6に相当し、2014年の学校偏差値と比べ「④標準的な偏差値との差=③-①」8.6も偏差値が低いこととなります。

このように、一部に偏差値と大学合格実績が対応していない学校もありますが、大部分の学校は偏差値と大学合格実績が対応していることが分かります。



<資料7>

NO.	学校名	①2014年首都圏模試結果偏差値	②2014年卒業生100人当たりの合格者数	③②の合格数で標準的な偏差値	④標準的な2008年偏差値との差＝③-①
1	桐朋	62	22.5	70.6	8.6
2	城北埼玉	53	4.4	61.5	8.5
3	桐蔭学園中等	60	12.1	67.1	7.1
4	帝京大学	58	7.9	64.7	6.7
5	桐蔭学園	51	2.2	57.5	6.5
6	巣鴨	63	17.4	69.1	6.1
7	城北	61	12.0	67.1	6.1
8	攻玉社	63	16.0	68.7	5.7
9	東京学芸大学附属国際	59	7.3	64.3	5.3
10	西武学園文理	50	1.2	54.4	4.4
11	世田谷学園	62	10.5	66.3	4.3
12	桐光学園	56	3.6	60.3	4.3
13	創価	56	3.5	60.2	4.2
14	東京都立立川国際	58	4.9	62.1	4.1
15	本郷	62	9.4	65.7	3.7
16	公文国際学園	62	8.3	65.0	3.0
17	穎明館	60	5.6	62.9	2.9
18	高輪	59	4.3	61.3	2.3
19	学習院	65	12.4	67.3	2.3
20	早稲田	71	36.0	73.2	2.2

色々な方法で、偏差値と大学合格実績の関係を調べてきましたが、一部に例外はあるものの、偏差値と大学合格実績は対応していることが分かります。

リーマンショック以降の受験者数が減少局面でも学校全体の偏差値は減少せず、相対的に受験者数の減少が少なかった上位ランク校は偏差値が増加し、相対的に受験者数の減少が多かった中下位校の偏差値は減少しました。

学校全体では偏差値の平均は、論理的には偏差値 50 となるはずで、受験者数の増減には影響されないはずで、つまり、個々の学校で偏差値が増加している学校があれば、偏差値が下がっている学校があるはずで、考えてみれば当たり前のことですが、偏差値は相対的な評価なのです。

受験者数と偏差値の関係は、個々の学校では、人気が出れば受験者数が増加し、偏差値は上がります。しかし、学校全体では受験者数が増加・減少しても学校全体の偏差値が増加・減少するわけではありません。